情報の交差点に立って命の真実を伝えたい

Ito Shunya
写真家・医療ジャーナリスト、医療情報研究所法人代表、医療事故市民オンブズマン・メディオ代議員、東京都医療安全推進事業評価委員、日本医学ジャーナリスト協会会員。主婦の友社を経て1982年よりフリーランスカメラマン。94年に自身の父親を医療事故で亡くしたことをきっかけに医療ジャーナリストの道へ。同時に市民活動家として97年「医療事故市民オンブズマン・メディオ」を設立。2000年より医学ジャーナリスト協会会員。同年株式会社 医療情報研究所を設立し、医療改善のためのさまざまな活動にあたっている。著書に『これで安心！病院選びの掟111』（講談社）『患者力で選ぶいい病院』（扶桑社）など。

伊藤 隼也さん（医療ジャーナリスト）

フォトジャーナリズムの視点から、全国の医療現場を精力的に取材し、雑誌やテレビなどのメディアで発表し続けている伊藤隼也さん。社会に対し日本医療の現状をわかりやすく伝えながら、患者主体の医療を提言している伊藤さんにお話を聞いた。

転載・二次使用禁止

「認められない」死がはじまり

10年前、雑誌のグラビアやコマーシャルフォトを手がけるフリーカメラマンから医療ジャーナリストへ転身した伊藤隼也さん。エンターテインメントの世界から、いきなり医療の世界へ足を踏み入れるきっかけとなったのは1994年、父親を医療事故で亡くすという出来事。それは「認められない死」であった。

「家族の死をどう認めていくかというグリーフワークは、死を受容していく上でとても大切だと思いますが、我が家の場合は認められない死だったのです。何が起きたかさえ明らかにされない医療への怒り、父の死の真実を追求したいという気持ちが、私にとってのはじまりでした」

その後、伊藤さんは同じく医療事故で家族を亡くした人を訪ね歩き、苦しむ人々が自分たちに起きた事態を論理的に整理できる状態にないことに気がついた。伊藤さん自身も件の医療機関と対峙するためにも、もっときちんとしたデータが必要だと痛感し、仲間と一緒に「医療事故市民オンブズマン・メディオ」を設立し、積極的な社会活動を続けた。

「私は何か事が起きた時、泣き寝入りしつつやり過ごすというタイプの人間ではありません。物事に立ち向かい、自分の周りに起きていることに自ら巻き込まれ、さらに周囲も巻き込んでいきました」

生活の営みとしての医療

伊藤さんはこうした社会活動と並行して、フォトジャーナリストの視点から医療事故の現場や患者の取材を続けていった。父親の死の真相究明には、何らかの形で医療の世界を覗いていくということが一番の近道だと感じていた。

「以前は、医療とは特殊な世界で専門性が高く、なかなか理解しにく

い世界だというイメージを抱いていました。ところが医療の世界に足を踏み入れてみると、『医学』の専門性は高いけれど『医療』は人間の営みに基づいたもので、素人であっても理解したり考えたりすることができる世界ということを感じたのです。それと同時に、医療機関という特殊なところに就職した人は、自分も社会の生活者であるという普通の感覚を捨ててしまっていることが多いと気がつきました。医療事故が隠蔽されてしまうシステムもそうした感覚が根底にあるのではないでしょうか。まさに『白い巨塔』という言葉が表しているように、普通の常識ではなかなか捕らえにくい世界でもあることを痛感しました」

人間の真実を伝えるために

医療事故被害者のルポルタージュを中心に取材活動を続けた伊藤さんだが、医療事故・医療トラブルの現場で見えてきた多くのものを糧に、この経験をプラスに転じていく活動をしたいと思いはじめていた。

「負の現場の真実をフォトジャーナリストとして伝えていく一方で、多くの心ある医療を人々に紹介したい思いがありました。私は限りなくネガティブなものと同時に、たくさんのポジティブな現場にも出会ってきたといえます」

あるホスピスでは、余命1週間というがん末期の患者と一緒に誕生日を祝っている看護師がいた。余命幾ばくもない母のために娘の結婚式を施設内で執り行ったホスピスもあった。

「素晴らしい医療をやっている人もたくさんいます。それも含めて医療の現場で起こっていることを人間の真実として伝えるのが私の仕事だと思ったのです」

患者としてまた医療事故の当事者としての活動と、冷静に物事を眺めて直感的に判断する写真家としての資質、そこに論理的に物事を考える力が加わることで、医療ジャーナリストとしての伊藤さんの活動のスタイルが自然と形になっていった。

「これまでの医療ジャーナリストには、新聞や専門誌出身者が多かった。つまり医療側にかなり近い人たちがつくる医療ジャーナリズムになっていたということです。しかし医療は社会や生活の営みであるという意識が私にはあります。そこで私は受け手である患者の声を聞くことを積極的に行っています。ただ難しいのは、患者の声を聞くことがすべての正解ではないということです。例えば、インフォームド・コンセントにしても、患者におもねる医療従事者がいますが、おもねるというのは、真実につながらない。それが患者中心の医療ではない。患者自らが判断できるような環境を提供できる医療が私は理想だと思っています」

看護とは人類最高のアートに参加する仕事

理想の医療のために必要なものは情報であると伊藤さんは言う。

「日本は欧米に比べると患者に十分な情報提供がされていません。質が高く現代の水準に合う医療を選択するには、そのための情報がなければいけません。私はその交差点に立って、自分が見た医療を紹介していくということを積極的に始めています」

『患者力で選ぶいい病院』（扶桑社、定価1、500円）

人々の命と健康を守るためには、医療を提供するだけではなく、患者がセルフマネジメントの意識を高める必要もある。そうしたアドバイスやサポートができる環境が医療現場に必要であり、その現場づくりの最前線に立つのが、患者と接する機会が多い看護師だと伊藤さんは言う。

「看護師という職業は、当然多くの人たちの笑顔を見て、時に悲しみに出会うかもしれないけれど『人が人を癒す』という人類最高のアートに参加できる仕事。その原点に立ち返って、素の自分になることも大切だと思います。私も医療ジャーナリストが職業になりましたが、原点は『これでご飯を食べる』ことではなく、『命の真実を知りたい』ということなのです。情報の交差点に立って、さまざまなものを覗いているのは、医療というものをどうやって大切にしたらいいかを、私自身が考える旅に出ているのです」

（取材／林口 ユキ）

転載・二次使用禁止